

水 稻 畦 立 栽 培 に 就 いて

泉 壽

熊本縣立農事試驗場

熊本縣立農事試驗場に於て昭和20年より試験開始、九州支場により設計、栽培法は高橋昇博士の研究方法に準じた。

試験方法の概要

初年目、平畦正條植區（標準）畦立並本植1坪56株區、同72株區、平畦並本植72株區（比較）の4區を設け標準肥の5割減を施用した。

2年目、標準區に標準施肥區を増加した。

3年目、畦立72株植區は前2ヶ年の成績で不良と認めためたので本年は中止した。

各試験區を標準肥、5割減肥區を設け湛水區、旱水區の4區制とした。標準肥は反當堆肥300貫過石、9貫硫安9貫である。

畦立栽培の方法

挿秧1週間前は全面耕起し碎土地整しを行ひ、畦巾2尺5寸にて深さ5寸程度の施肥溝を切り下層肥に金

肥元肥の3分2量に施し2寸位間土をする。其の上に中層肥として堆肥と金肥の残量を施し覆土する。しかして根付肥を上層肥として施肥し覆土しながら畦の形を整へる。挿秧後2週間目に1回畦土上げをやり8月中旬除草溝土上げを行つた。平畦區は一般栽培法に準じた。

生育概況

畦立區は植傷み甚だしく下葉の殆が枯死する如き事もあつたが新葉が出始めると草丈莖數は増加、葉色は濃く其の後の生育は活潑である。

出穂期は標準區に比し1日乃至2日遅れ成熟期も又おくれた。收穫期に於ける稈長、穂長、穂數の關係は稈長穂長穂數共標準區より畦立區が勝り特に穂長に大きな差があつた。平畦並木植區の穂長は各區を通じて最高であつたが穂數は少々少なかつた。

收 量

反當玄米收量にて比較すれば標準區に於ては3ヶ年共畦立區が平畦標準區より1割弱の増收を示し、少肥栽培に於ても約1割程度の増收を示した。

平畦並木植區は標準區に比し毎年收量は悪かつた。

考 察

挿秧後の生育は始め植傷の爲若干おくれるが後期になれば莖數、稈長、穂長共に標準區より上位となり、葉色も濃く又無効分蘗が多い事等より肥料の流失が少なく最後迄利用される事が感知される。又出穂期が標準肥の平畦區と畦立少肥區が同程度であつて標準肥區に於ては標準より1乃至2日遅い事等も以上の關係を證明するものではなからうか。管理の改善により無効分蘗を抑制する事が出来れば今以上の増收が期待出来ると思われる。